

東日本大震災の被災地調査の報告—大川小学校を中心に—

北林 雅洋

KITABAYASHI Masahiro

香川大学教育学部

キーワード：地震、津波、避難、避難所、CST

1. はじめに

本報告では、香川 CST 事業の一環として実施した東日本大震災の被災地調査の結果を、特に大川小学校の事例を中心にまとめて示す。

香川 CST 事業は、香川大学と香川県教育委員会が共同して実施している事業で、2011 年度に科学技術振興機構 (JST) の理数系教員 (コア・サイエンス・ティーチャー) 養成拠点構築事業の一つとして採択された。その企画名は「日常生活や社会との関連を意識した授業実践力の向上を目指した CST 養成システムの構築と実践」であり、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災から学ぶことも念頭に置きつつ、「日常生活や社会との関連」を企画名に位置づけている。

今回の調査では、実施中に津波警報が発令され、避難生活を短時間ではあるが実際に体験することもできた。本報告は、この偶然の体験も含め、それをふまえた調査の結果である。

2. 調査の概要

2012 年 12 月 7 日：菊池英行氏 (元高校地学教師) による案内・解説。東松島市大曲浜・石巻市日和山・石巻市立門脇小学校・旧女川町立病院、これらの周辺を視察。17 時 18 分、三陸沖で M7.3 の地震が発生、本塩釜駅停車中の電車内で震度 4 の揺れに遭遇。続いて 17 時 22 分に津波警報が発令。指定避難場所の祓ヶ崎稻荷神社に避難。19 時 20 分、津波警報解除。避

難所を後にする。

2012 年 12 月 8 日：避難場所まで実際に歩く。石巻市立大川小学校・石巻市立門脇小学校について。また、前日 1m の津波を観測した石巻市鮎川地区を視察。

3. 実際の避難体験から

(1) 毅然とした態度の重要性

2012 年 12 月 7 日の地震発生時に、報告者は仙台に向かう JR の電車内にいた。本塩釜駅に停車と同時の 17 時 20 分頃に、緊急地震速報を携帯電話が受信した。その内容を確認している間に、大きく揺れ始めた。比較的長時間の揺れが続き、「3.11 のときと似ている」と話す乗客もいた。報告者は座ったまま何もできなかった。あわてて電車から降りて駅ホームに出ていく乗客もいたが、「車内の方が安全」という乗客もいた。17 時 22 分、宮城県沿岸に津波警報が発令され、携帯電話もそれを受信した。駅員がすぐに乗客に指示をして、近くの指定避難場所への誘導を始めた。駅員はとても毅然とした態度で誘導し、乗客全員がそれに従って避難行動をとった。

津波警報による避難を、報告者は初めて経験したが、駅員と周りの乗客の行動のなかで、迷うことなく避難行動をすることができた。東日本大震災を経験した後だからということもあるが、避難を指示・誘導する者および率先して避難する者の毅然とした態度が、全体の避難

行動をスムーズに展開する上で、とても重要であると痛感した。

(2) 警報で避難し続けることのたいへんさ

指定避難場所の祓ヶ崎稲荷神社は、標高約 20m の高台にある。近隣の住民も避難していて、「3.11 はもっと寒かった」という。それでも、神社の境内にずっと立ち続けていると、10 分ほどで寒さが身にしみてきて、疲労感が増し、いつまで避難が続くのかと、先の見えないことによる不安感が強まる。約 20 分後に宮司の方が神社を開放し、屋内と自宅内に、それぞれ約 20 人と 60 人の避難者を誘導した。トイレも解放され、石油ストーブも提供された。報告者は石油ストーブが使用されている神社の屋内で畳に座り続けていたが、それでも冷えて寒さに震えた。

このように、比較的恵まれた条件の避難場所においてさえ、来ないかもしれない津波に備えて警報による避難を続けるのは、たいへんなことである。条件の悪い場所に避難せざるを得ない場合には、別の危険性にさらされることも、考慮されなければならない。その場合でも、避難を指示・誘導する者、率先して避難する者には毅然とした行動が求められるが、それはかなり困難なことである。

(3) 携帯ラジオの必要性

幸い、停電していなかったので照明もあり石油ストーブも使用できたがテレビはなく、携帯電話が活用された。しかし、すぐに充電が必要になるものも多く、その点では携帯ラジオからの情報がとても貴重であった。女子高校生が携帯ラジオをつけてくれて、それをみんなで聞いていた。警報の解除も、ラジオで確認することができた。

たとえ停電になっても情報を確実に得るた

めに、携帯ラジオは必要不可欠である。

4. 大川小学校の難しさ

釜石東中学校の事例は「奇跡」といわれ、それを大川小学校の場合と比較して教訓と課題を引き出そうとする試みもある¹。しかし、置かれた状況・条件が大きく異なるため、それらを考慮した比較が必要となる。特に、大川小学校の場合の難しさについては、実際の状況を体験的にも理解したうえで、十分に考慮される必要がある。

大川小学校の裏山への避難が可能だったのではないかという意見がある²。裏山の小さな沢沿いの細い道は、登っていくことは可能だが足場が悪く、多くの人数がそこに留まり続けるには狭くて不安定である。そのすぐ脇に急斜面があり、斜面の途中に 3 段ほど、幅 1m ほどの平らな面がコンクリートで固められて造られている。しかしこれらは、崩れやすい斜面を補強するためのものであり、大きな余震が続く中でそこへの避難は、別の大きな危険性を伴うものとなる。このように、大川小学校の裏山は、津波に備えて避難し続けるには条件の悪い場所であった。

大川小学校はハザードマップに基づいて、避難場所に指定されていた。そこからさらに避難するという判断、しかも条件の悪い場所に寒い中で長時間避難し続けるという行動を、率先して毅然と行うのは、かなり難しいことであったと思われる。

注

¹ 例えば、近藤真庸「東日本大震災と津波防災教育—教訓と課題」『日本の科学者』2013 年 10 月、pp.26-32、など。

² 上記の近藤の他にも、堀雅敏「津波被災地を歩く」『科教協ニュース』2012 年 12 月、pp.6-9、など。